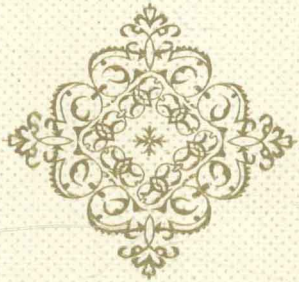

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

4

ゲーテ

ファウスト 第二部　手塚富雄訳
ヘルマンとドロテーア　登張正実訳
短篇5篇

中央公論社

新集 世界の文学 4
©1970

ゲーテ

訳者 手塚富雄
登張正実
氷上英広
生野幸吉
柴田 翔

昭和45年1月25日初版印刷
昭和45年2月5日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

ファウスト　第二部　3
ヘルマンとドロテーア　275
短篇
イタリアの弁護士　349
メールヒェン　367
新しいメルジーネの話　397
五十歳の男　420
ノヴェレ　477

解説

年譜

521 500

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

ファウスト　悲劇

『ファウスト』第一部のあらまし

捧げることば　巻頭におかれた詩。ゲーテの二十代の初めに書き起こされた『ファウスト』は、断篇のままになっていた。それを彼は一七九七年に、腰をすえて仕上げようと決意し、その気持をまず読者にむかって述べたのである。長い年月の経過のうちに、世を去った親しい人も少なくなく、これを読んでくれるであろう人たちもすっかり変わっている。でも、自分は、かつて自分の胸中に描かれて、いまたよみがえってきた作中の諸形姿を「今こそ……しかと捉えてみようか」というのである。

舞台での前戯　筋立てには関係なく、大規模な演劇の開始をくだけた調子で先触れしたものである。座附きの詩人は真の芸術的制作をめざして、脚本を書く筆が進まない。座長はこの興行の大当たりを願って、早く書けというながす。道化がその間に立って、種々のやりとりがあり、けっきょく、天国とこの世と地獄を股にかけた芝居が始まることが暗示される。インドの劇『シャクンタラー』の短い前曲にヒントをえたものである。

天上の序曲　全曲のテーマとその構想の骨格を示す重要な場である。神を前にして三大天使のうたう神の事業への讃歌がすばらしい。そこへ悪魔メフィストフェレスが出てきて、口をきわめて人間の愚劣をののしる。神はファウストを例にとって、よい人間は迷うことはあっても、正しい道を忘れぬものであるという。そこでファウストを救いのない堕落へ引きこむことができるかどうか、神とメフィストのあいだに賭が成立する。これには、旧約「ヨブ記」の冒頭への連想がある。なお、神の摂理の中でメフィストの占める位置が、おこたりがちな人間に対する刺激なのだと、神によって説かれる。

悲劇　第一部

夜　ファウストの知的煩悶の場である。世界を奥の奥で総べているものをたずねて、老学者ファウストはあらゆる学問を研究しつくしたが、その欲求は充たされない。呪文によって地霊を呼び出すと、おのが無力を思い知らされるだけであった。このファウストの痛切な探求精神にくらべれば、助手ワーグナーは、低次の学究的知識欲の奴隷であるにすぎない。けっきょくファウストは死に

よって新しい天地にはいろうとして、毒液を飲もうとする。そのとき春の祭りの復活祭の訪れを告げる天使の合唱が、彼を生へと引きもどす。

市門の前　市外の野に復活祭をたのしむ市民や農民の群れ。ファウストもワーグナーとともに散歩し、自分の心の中の現世的な欲求と高い精神の世界へのあこがれとの分裂を語る。魔法の外套でも手に入れて未知の国々へ飛んでゆきたいという彼のことばを待ちかまえていたように、メフィストがむく犬に身を変えて近づいてくる。

書斎　ファウストが聖書の「ヨハネによる福音書」の最初の箇所を訳そうとして、「はじめに行為ありき」という表現にたどりつく有名なくだりがある。メフィストがむく犬から旅の学生に姿を変えて、ファウストと問答する。しかし、まだ腕をふるうべき機を得ず、退散する。

次の場面も書斎である。メフィストが貴公子の姿で現われる。問答の末、両者のあいだに契約が成立する。人間として男子としてやすむことなく活動し、人類と運命を共にしようとするファウストは、瞬間にむかって「とまれ、おまえはじつに美しいから」と言って安住したら、魂を悪魔にわたすというのである。大学新入生が訪ねてきて、ファウスト教授に成り変わったメフィストに、さんざんからかわれる。この新入生は第二部の得業士の前身である。

ライプチヒのアウエルバッハの酒場　前の場の契約で現世では万事にファウストに奉仕することになったメフィストが、最初に彼を連れてゆくのが、この酒場である。しかし老ファウストがそれに惹かれるはずはない。

魔女の厨　次に案内するこの場所で、魔女の操作によって、ファウストは若返る。それには魔法の鏡に映しだされた美女の姿も作用している。

以下、後半部は、グレートヒェンの悲劇で、可憐な町娘グレートヒェンが、若いファウストとのあいだの恋で、一歩一歩破滅にむかってゆく過程が、約一十の短い場面の連続によって展開される（魔女のつどう官能的な「ワルプルギスの夜」の場は、やや長い）。全体はこの上なく魅力に富み、哀切である。ついにグレートヒェンは眠り薬の誤用で母を死に至らしめ、兄もファウストたちに殺され、ファウストとの間に出来た子をも死なせる。その罪で牢獄に入れられた彼女をファウストは救い出そうとするが、罪を悔い、神と聖母マリアにすべてをゆだねた彼女は、脱出をこばんで刑死を待つ。恋人を破滅させたファウストは、心を残してその場を去る。

手塚富雄

悲劇　第二部

第一幕

優雅な土地

ファウスト、花の多い草野に身をよこたえている。疲れきっており、不安にかられていて、眠りを求めている様子。

薄明。

精霊たちが輪をつくって、ただよい動いている。優美な、小さなものたち。

アーリエル（歌。エオルスの琴[**]の音を伴奏として）

木々の花が春の雨のように
人みなの上にそそぎ
野にひろがる緑の祝福が
すべての大地の子らにかがやくとき、
小さな精霊たちは大きい霊の力を担って
援けの手をさしのべようと急ぐ。
心正しい者にせよ、邪悪な者にせよ、
不幸に沈む者に霊たちの憐れみはかかるのだ。

さあ、お前たち、ここに臥している若者のまわりを飛びめぐって、
いつもの気高い精霊のはたらきを現わしてくれ。
はげしく悩むその心のみだれを和らげ、
自分自身を責めつける矢の、焼くような痛みを除き、
ぞっとするようなこれまでの体験から、その胸を浄めてやれ。
夜には四つの区分[***]がある、
さあ、すぐそれをみなお前たちの心づくしで充たすのだ。
まずかれの頭をひやびやとした枕にのせ、
それからレーテ[****]の流れの送ってくる露で浴をさせるがいい。
するとほどなく、引きつっていた手足のこわばりもとれ、
新しい力にみたされて、静かに夜明けを迎えることができよう。

さあ、妖精のいちばん貴い義務を果たすのだ、
この命を神聖な朝の光に返してやれ。

合唱（一人で、二人で、または大勢で、かわるがわるに、また同時に、歌う）

なごやかな風が
緑につつまれた野に充ちわたり、
たそがれがやさしい香りと
霞の帷をしずかにおろせば、
わたしらは憩いの幸をそっとささやいて、
不安におびえる心を幼子のようになだめよう。
そして静かにそのまぶたを閉じさせて、
疲れたひとを眠りの国にみちびこう。

夜は早くも深く沈んで、
きよらかに星は星に寄り添う。
大きい光、小さな火花が
近くにきらめき、遠くにかがやく。
下にたたえる湖には影を落としてきらめき、
高みにひろがる空には澄んでかがやく。
さて深い安息のこよない証として
月は隈なくあたりを統べる。

早くも夜の時刻はうつり、
悩みも幸も影と消える。
喜びは間近だ、あなたは癒えよう。
新しい日の光を信ずることだ。
谷々は緑し、丘々はやさしくふくらんで、
茂る木々とやすらかな蔭とで招く。
そして銀いろに波打ちながら
穀物はとりいれの日を待っている。

つぎつぎに胸に生まれる願いを遂げようため、
かなたに昇る光を仰ぎ。
そなたが囚われていると見えるのは、ただかりそめのこと。
眠りは殻、それを投げ棄てよ。
臆することなく起って進め、
世の人々はためらい惑うとも。
気高い者が明知をもって事にあたれば
すべてのことは成就するのだ。

（すさまじい轟音が太陽の近づいたことを告げる）

アーリエル

聞け、聞け、時の神*たちの疾風を。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

霊の耳は、このとどろきに
早くも新しい日の誕生を聞き取る。
岩の戸はからからと音高く開き、
太陽神の車輪はごうごうと猛進する。
光の音のなんというすさまじさ。
大小のラッパの声、
目はまばたき、耳はすくむ。
聞きも及ばぬ響きを聞くことは堪えがたい。
深く深くくぐり入れ、静かな
住み家を求めて。花のうてなに、
岩のはざまに、葉蔭の奥に。
この音に打たれれば、お前たちの耳は癒いるのだ。

ファウスト　生命の脈搏がよみがえった力で打ちはじめて
エーテルのみなぎる黎明にやさしい会釈を送る。
大地よ、お前はこの一夜もいつもと変わらぬお前だった。
そしていま新たな活気にみちてわたしの足もとに息づき、
はやくも歓びでわたしを取り囲もうとしている。
お前はわたしを揺すぶって強い決意へと励ます、
最高の生き方をめざして絶えず努力をつづけよと。——
世界は早くもほのめく光のなかに胸を開き、
森は幾千の生命の声をひびかせている。
谷の内そとには霧がまだ創いまつわっているが、
空の光はどんな深みへもとどいて、
いままでうなだれて眠っていた樹々の枝は
香わしい谷間から生き生きとよみがえって頭をもたげる。
またさまざまの色どりがくっきりと大地に浮かび出て
花も葉もふるえる真珠を滴らしている。
わたしを取りまいて世界は天国のようになってゆくのだ。
見上げればどうだ。——巨人のような山々の頂は
もう壮麗な時の間近いことを告げている。
永遠の光をいちばん早く浴びることのできるのが、あの
絶頂なのだ。
それからその光はわれわれの方に降りてくるのだ。
いまアルプスの急勾配の緑の草地に
新しい光と輝きが注がれた。
そして一段一段とそれは下におよんでくる、——
日の出だ！——だが、ああ、はやくも眼がくらんで
わたしは顔をそむけるのだ、眼の底までしみとおる痛み
に堪えかねて。
譬えてみればこうだ、あこがれに駆られて
最高の願望へと馴れ馴れしく迫ってゆき、

成就の扉が眼の前に惜しみなく開かれているのを見る。
ところがそのとき、あの永遠の深みから
強大な炎が噴き出してくる、われわれは驚いて立ちすく
　むのだ。
われわれはただ生命の松明をともそうと思ったのに、
火の海に囲まれてしまったのだ、なんという火！
それは愛か、憎しみか、われわれを焼きつくそうと襲っ
　てくるのは。
苦痛と喜びをかわるがわる繰り出して、すさまじくから
　みつく、
だからわれわれはまた眼を地に向けて、
まだ明けきらぬヴェールの中に身をかくそうとたじろぐ
　のだ。

では太陽よ、おれはお前をうしろに負おう。
そして岩壁をけずってたぎり落ちる
あの滝をじっと眺めると、おれの心にはしだいに歓喜が
　高まってくる。
現われては落ち、落ちては激する水は、千の流れとなり、
万の流れとなって、空高く
しぶきの帷を吹きあげる。
だが、この水の嵐の中から生まれ出て弓を懸けわたして
　いる
変化しながら持続している虹は、なんという美しさだ。
あざやかに描き出されるかと思うと、また空に散り、
涼しく香わしいそよぎをあたりにひろげる。
あれにこそ人間のいそしみは映し出されているのだ。
この虹のもつ意味を考えてみよう、そうすればもっとよ
　くわかってくるだろう、
本源の光の色さまざまな反映、それがわれわれの生なの
　だ。

皇帝の居城

玉座の間

大臣たち、帝の出御を待っている。
　ラッパのひびき。
文武百官、きらびやかな服装で登場。
皇帝、現われて玉座につく。その右手に天文博士。

皇帝　忠誠なおんみたち、ようこそ

遠近から参集された。――
さて博士はわしのわきにひかえておるが
阿呆が見えぬのは、どうしたことじゃ。
貴公子　陛下の御衣の裾に取りつくようにしてお伴しておりましたのに、
階段の途中で卒倒いたしました。
さっそくあの脂肪肥りの図体を担ぎ出しましたが、
酔ったのか、死んだのか、わかりませぬ。
第二の貴公子　ところがあっと思う速さで
別の男が後釜に坐ろうと割り込んでまいりました。
なかなかめかしこんでおりますが、
人相が異様なので、誰しもぎくっといたします。
衛兵たちが闘ぎわで、
矛を十字にさしわたして、さえぎっております――
おや、だがもうあそこに参りました、場所柄もわきまえぬ痴れ者めが！
メフィストフェレス（玉座の前にひざまずく）　いやなやつだと言われながら、いつも歓迎されるものは何でしょう。
いつも熱心に待たれながら、来れば追い払われるものは何でしょう。
いつもかくまっていただけるが、
手きびしく叱られたり、苦情をいわれたりするものは何でしょう。
陛下がご相談相手になさってはいけないものは誰でしょう。
ところがその名をみんなが聞きたがる、それは誰でしょう。
陛下の玉座の階段まで推参するものは誰でしょう。
自分で自分をお払い箱にしたものは何でしょう。
皇帝　そんなお喋りは今はよせ。
謎々遊びをしている場合ではない。
いま謎を掛けるのは、ここに居並ぶ紳士がたのすることだ。*
その謎を解くのなら、聞いてやろう。
いままでの阿呆は、どうやら遠いところへ旅立ったらしいな。
お前がその代わりをつとめろ、わしのそばにおるがよい。

（メフィストフェレス、階段を昇って、帝の左手に侍る）

一同のつぶやき　新参の阿呆だ――新規の苦労だ――
どこから来たのだ――どうしてはいりこんだのだ――
今までのは卒倒した――年貢の納めどきが来たのさ――
あいつは酒樽だった――今度のは木端野郎だ――
皇帝　では、忠誠なおんみたち、

遠近から来られたのをうれしく思うぞ。
卿らはよい星のもとに参集したのだ、
空にはわれわれをことほぐ幸運と祝福のしるしがある。*
だが、いったい、なぜ、折も折、
われわれが平素の憂さを払いおとして
仮装の舞踏会をもよおし、
もっぱら陽気に楽しもうとしているこの謝肉祭のさなか
に
面倒な評定沙汰で、われわれは頭を痛めなければならない
のか。
だが、そちたちが、どうしてもほかに仕方がないと申すので、
このように一同を召集したのだ、では始めるがよい。

宰相　最高最善の徳が、聖者の光輪のように
陛下のおつむりを取りかこんでおります。その徳を
適切に用いることのできますのは、陛下おひとりでございます。
すなわちそれは正義の徳でございます。――万人が愛し、
求め、願い、欠かすことのできないこの徳を
人民に施されるのは、陛下の思召しひとつによることでございます。
しかるに、ああ、国じゅうが熱病におかされたように乱れ、
悪事がいっそうはなはだしい悪事を生んでいるこの有様では、
心には分別、胸には慈愛、
手にはいそしみがありましても、何の役に立ちましょう。
誰にせよ、この高い宮殿から広い国うちを
見おろしますならば、まるで悪夢を見ている思いをいたすことでございましょう。
化け物が大っぴらに化け物姿で歩いております。
無法が法として威をふるい、
間違いだらけの世の中となってまいりました。
家畜を盗む、女を盗む、
祭壇から、杯、十字架、燭台をかすめます。
そして何年たっても、罰も受けず、祟りもないと、
その悪事を自慢し合っております。
そこで訴訟人たちが裁判所に押しかける、
裁判官は高いところに威儀をつくって構えておりますが、
そのあいだにも、暴民の群れはふくれ上がって
怒濤のように押しよせてまいります。
どんな悪事や破廉恥行為も、有力者とぐるになってしたことは、

大いばりでまかり通る。
それに反して、罪はなくとも、味方がなければ、
「有罪」と判決されてしまいます。
こうして世の中の事は一切合財ばらばらになり、
道理も無きにひとしいものとなろうとしております。
こういう状態では、わたしたちを正道にみちびいてくれるただ一つのもの、
あの分別も、どうして育つことができましょう。
しまいには心正しい人物も
おべっかに耳をかし、賄賂にほだされるようになり、
罪を罪として罰することのできない裁判官の中からは
けっきょく犯罪人の仲間入りをする者も出てまいります。
これでは絵をあまりに黒く描いたとも思し召されましょうが、
実はもっと厚いヴェールをかけたいくらいでございます。

（間）

ご決断のほどを願いあげます。
万人が害しあい、盗みあうこの有様では
陛下のご尊厳さえ盗人に狙われぬとはかぎりませぬ。

兵部卿　このごろの世の乱れは、どう申したらよろしゅうございましょう。

誰もかも殺す、そして殺される。
命令を下しても、みなどこ吹く風でございます。
市民は町の城壁のかげに、
騎士は岩山の巣に立てこもり、
結束をかためて、中央の命令と恨くらべをし、
兵力も財力も吐き出すどころではございません。
傭兵どもはもう待ちきれずに
大声をあげて給料の支払いを要求しますが、
残らず払ってしまいましたら、
たちまち逐電してしまいましょう。
彼らがやりたがっていることを差し止めたところで、
蜂の巣をつついたような結果になるのは目に見えております。
彼らが元来護るべき帝国が
掠奪され荒らされるままになっておるのでございます。
こうして彼らのあばれるのを手をこまぬいて見ているうちに、
国の半ばはもうだめになってしまいました。
国外にも同盟の諸王はおられますが、
どなたもそれをわが事と考えてはくれませぬ。

大蔵卿　なんで盟邦などがあてになりましょう。
約束の分担金は

水道の水が切れたように切れております。
それに陛下、この広大な陛下のご領土も
その所有権は誰に握られてしまったのでございましょう。
どこへ行っても新顔がのさばって、
誰の支配も受けないと申しております。
勝手なことをしているのを黙って見ているほかはありません。
あまりに多くの権利を譲ってしまったので、
今はわたしどもの手には何ひとつ権利らしい権利は残っておりませぬ。
それに、党派も、いろいろと看板は出しておりますが、
こんにちでは、いっこう頼りになりませぬ。
彼らの賛成も反対も、
好意も憎しみも、けっきょくは国のことなど、どうでもいいのでございます。
皇帝党も法王党同様、
うしろに引き下がって、なんの働きもいたしません。
誰にせよ、こんな時節には、隣人を援けるどころではございません、
めいめい自分のことで手いっぱいでございます。
金のはいってくる道はみなふさがってしまいました。
誰もかれも自分のためにあくせく搔き集めるだけで、
国庫はいつも空でございます。

宮内卿　わたくしも実に難儀をしております。
毎日節約を心がけてはおりますが、
入用なものは毎日ふえ、
日ごとに新しい頭痛の種がもちあがります。
料理人たちはまだ材料に不自由はしておりませぬ。
大鹿、小鹿、兎に猪、
七面鳥に鶏、あひるに鴨、
こういう物納の貢物は、確かな取り分で、
まだ相当にはいってまいります。
けれどもとうとう葡萄酒が不足してまいりました。
これまでは穴蔵に樽が山と積まれ、
産地も収穫年も最上のものが揃えてありましたのに、
高貴の方々が底なしに召し上がりますので
最後の一滴もなくなってしまいました。
それで市役所などの貯蔵分から小買いをせねばならぬ破目になりましたが、
それを皆さまは大杯に注がせる、鉢に注がせる、
しまいには床までたっぷりお相伴にあずかる始末。
ところでそのお勘定や諸手当は残らずわたくしが片づけなければなりませぬ。
ユダヤ商人は情容赦もございません、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb